

臨床腫瘍学VI

授業概要

臨床腫瘍学VIにおいては、がん薬物療法の基礎と臨床について学ぶ。基礎的学習として「各種抗がん薬の作用機序」や「多剤併用化学療法の原理」、「薬剤耐性機構とその克服」、および「分子標的療法の作用機序」等、がん薬物療法の実践に必要なとされる知識を学ぶ。臨床的には「オンコロジー・エマーゼンシー」・「各種薬剤特有の副作用や対処法」「支持療法の実際」などについて具体的知識を得るとともに、主要ながんにおける薬物療法を主体とした治療戦略の現状と将来的展望についても理解を深める。さらに、標準的がん薬物療法を確立するための方法として、臨床試験の理論・方法論を理解し、がん治療のガイドラインや EBM を理解する。

担当教員

鈴宮淳司（主担当）	教授・腫瘍センター/腫瘍・血液内科
磯部 威	教授・呼吸器・臨床腫瘍学
直良浩司	教授・薬剤部
松崎有未	教授・腫瘍生物学
西村信弘	准教授・薬剤部
鈴木律朗	准教授・腫瘍センター/腫瘍・血液内科

一般目標 general instructional objectives

1. がん薬物療法の実践に必要な基礎的・臨床的知識を獲得する。
2. がん薬物療法が治療戦略として確立している主要な悪性腫瘍に関して、その現状と課題に関して理解する。
3. 標準的がん薬物療法を確立するための臨床試験、ガイドラインや EBM を理解する。

行動目標 specific behavioral objectives

1. 各種抗がん薬の作用機序について分類、説明できる。
2. 多剤併用化学療法の原理を説明できる。
3. 薬剤耐性機構とその克服について説明できる。
4. 分子標的療法について、その基本的理論や臨床応用について説明できる。
5. 各種薬剤特有の副作用と用量規制因子について説明できる。
6. オンコロジー・エマーゼンシーについて説明できる。
7. 化学療法実施時の支持療法の実際について説明できる。
8. 造血器悪性腫瘍の診断と治療法について説明できる。
9. 骨髄移植の原理や応用について説明できる。
10. 肺がんの診断と治療法について説明できる。
11. 消化器がん・原発不明がんの診断と治療法について説明できる。

成績評価の方法

すべての講義および演習が終わった後、規定の出席率(2/3以上)を満たした学生に対し、課題を呈示し、レポートの提出等を指示する。そのレポート等を行動目標の達成度を主眼に評価する。

使用テキスト・参考文献

日本臨床腫瘍学会編集による「新臨床腫瘍学」改訂第3版（南江堂）

入門腫瘍内科学編集委員会／日本臨床腫瘍学会による「入門臨床腫瘍学（篠原出版新社）
 Cancer; Principles & Practice of Oncology 9th edition. Wolters Kluwer/Lippincott
 Williams & Wilkins
 米国 SWOG に学ぶがん臨床試験の実践 第2版（医学書院）

教育内容（講義および演習）

回	授業内容	担 当
1	がん薬物療法総論（Ⅰ）	鈴木淳司
2	がん薬物療法総論（Ⅱ）・オンコロジー・エマージェンシー	鈴木淳司
3	抗がん剤の薬理学（Ⅰ）	直良浩司
4	抗がん剤の薬理学（Ⅱ）	直良浩司
5	薬剤耐性機構とその克服	直良浩司 西村信弘
6	骨髄移植のサイエンス	松崎有未
7	抗がん薬の副作用と支持療法	直良浩司 西村信弘
8	造血器悪性腫瘍の診断と治療	鈴木淳司
9	造血器悪性腫瘍演習（Ⅰ）（症例カンファレンス）	鈴木淳司
10	肺がんの診断と治療	磯部 威
11	肺がん演習（Ⅰ）（症例カンファレンス）	磯部 威
12	消化器がん・原発不明がんの診断と治療	鈴木淳司
13	消化器がん・原発不明がん（Ⅰ）（症例カンファレンス）	鈴木淳司
14	臨床研究に必要な基礎的事項	鈴木律朗
15	がん治療のガイドラインとEBM	鈴木律朗